



勾留中の中国人男性が4月、最初の接見で言った。「私は無実です」。2年前の傷害事件で警視庁八王子署に逮捕されたが、否認を続けていた。訴えに不自然さはない。信じて闘う。すぐ決めた。

勾留が長引き、彼は「示談をすればいいのか」と弱音を吐いた。「ウソをついて認めるなら弁護人をおりる」と叱った。

検察側が「乗って逃げた」と主張したタクシーの会社から、別人の映る当時のドライブレコーダーの映像を入手。裁判でその存在を明かし、それを決め手に東京地検が7月、誤認起訴を認めた。

逆境を知る自分が逆境にいる誰かの力になりたいと、弁護士を志した。高校中退後は5年間、繁華

街で夢も目的もなく過ごした。大学進学は23歳のとき。亡くなる2時間前の祖父の言葉がきっかけだった。「まじめに生きる」

法科大学院を経て司法試験は最後の3度目、32歳で受かった。

東京で弁護士4年目。年に約100件手がける刑事事件を「綱引き」に例える。「本気で引き合わないと、あるべき結論にならない。相手は捜査機関や、時に世論。引く力が圧倒的に弱い被疑者側に僕はつきたい」。電話が鳴れば深夜でも車を飛ばす。留置施設を1日5力所以上回ることもある。

事務所の片隅に今回の公訴棄却決定書を飾った。無実を訴え続けた男性と2人、笑顔で撮った写真を添えて。